
Twin Dare Devil Adeline

字紀 彦助

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Twin Dare Devil Adeline

【Nコード】

N4873B

【作者名】

字紀 彦助

【あらすじ】

他人を操る力を持つ男、竜胆と、竜胆に操られることで彼の手足となって戦う男子高校生の渚。夜毎に敵を葬る二人に、過去最強の敵が襲い掛かる。それは…何と女子高生！？ Twin Dare Devilの続編です。

ターンターン、タタタタタターンターン
タタタタタターンターン、ターンターン

彼の耳にはそう聞こえる、その着信メロディ。

渚のアデリーヌ、と言うらしい。

別にわざと揃えたわけではないのだろうが、『渚』の名と共に渡された携帯電話に最初から設定されていた。

何度そのメロディで睡眠を妨害されたろう。

もうお馴染みだった、それが流れるのは“仕事”の時。

男子高生加藤潤平が、狂人の人形『渚』に変わる時だ。

「…もしもし」

冷え込む晩だ。渚は掛け布団の中に丸まったまま通話ボタンを押した。頭部さえ外に出したくない。夜間にエアコンをつける事は禁止されていた、彼と彼の姉の学費やら諸経費で加藤家の収支はぎりぎりだったから。

『…寒いですね』

電波に乗るとますます硬くなるその声。屋外からかけているらしい、びゅうびゅうと風の音まで流れてくる。渚はそれだけで背筋が寒くなった。

「…うん」

『寒いけど仕様が無い。出てくれるか』

「…うん」

『…電話を切ったら寝そうだな』

「…うん」

受話器の向こうで溜息が聞こえる。それでも意識が遠のくの渚は

感じた。眠気に脊髄からじわりと侵食される。

『君は俺を殺す気か。さあ、掛け布団を剥がして、よく着込んで出てきてくれ』

「…ん」

まるで教師のような口調。彼の品のいい声色は命令するのにうってつけた。なぜか腹を立てたり不平を抱く隙を与えない。

確かに、渚が行かなければ恐らく竜胆は死ぬだろう。彼は戦う脳味噌は持っていて筋肉を持っていないから。

しかし竜胆が死んだからといって『渚』が消えるだけで、加藤潤平には何の支障も無い。

だが何かが潤平を動かす。

掛け布団を引き剥がすと底冷えした部屋の空気が身にしみる。

着替えるときそれは絶望的になった。

Gパンに足を通し、パーカーを着る。

冷え切った衣服。不意に指に触れるGパンのジッパーが氷のように冷たい。渚は歯を食いしばった。

コート、マフラー、手袋。

彼の武装は唯一つ、アディダスのスニーカー。

踵と爪先に金属が仕込まれている。というか、仕込んだ。バスケットに入っておけば家族も誰も中身を調べたりしない。

この靴も何人の血を吸い、何本の骨を砕いたのか。

あながち極端な表現でもない。

彼に操られると、どこにそんな力がと驚くほどの破壊力をこの脚は生み出す。

正常な感覚を有していたはずの渚も最近どこかが麻痺しつつあるのを自覚していた。

自分の意思が手を下しているのではないという甘えもどこかにある。しかし踵が骨肉を粉碎する感覚は澱のように彼の意識に沈殿してい

た。

リュックに着替えを詰め込んで、部屋を出た。

築10年、生活感に溢れすぎた二階建て。

子供二人を育て上げたごたごたで疲れ果てているようだ。

明かりが点いてさえどこか薄暗いそこ。深夜には闇を一層ムーディに仕立て上げる。

忍び足で姉の部屋の前を通り過ぎる。

軽いフットワークはバドミントンで吐くまで鍛えられた。

それが今や家族にさえ言えない理由で使われている。

部員や顧問、コーチにも、知れたとして反応さえ想像がつかない。

「…やあ。こんばんは」

「…ンばんわっす」

電車も無い深夜。

太陽に完全に見放された時間。熱量という熱量は地上から消えうせているようだ。

待ち合わせの廃ビル前。

実は渚の自宅から徒歩で充分行ける距離である。

竜胆もコートを着ていた。といっても、渚のPコートのような子供っぽいものでない。

「君、随分厚着だね」

竜胆が苦笑混じりに言う。

言いながら、廃ビルの中へ歩き出した。渚もそれに従う。

「…寒いじゃないスカ」

渚はマフラーに口を埋めたまま言った。口の中にさえ冷気を入れたくないらしい。

「体動かい」

「…わかんね」

鉄筋の芯まで冷気を溜め込んだビル内は益々気温が落ちる。

渚は不意に吹き上げた風に「うわ」と言っただけ抱えた。

「わかんねって、無理に動かして何処か痛めでもしたらどうする」

「…別にいいよ」

「どうして」

「……部活もないし」

「？ 毎日部活じゃなかったか？」

「やめた」

「……」

そこで背後に気配。

竜胆が眼鏡を押さえる。

渚の脚が薄暗い闇に素早く円の軌跡を描く。

竜胆が舌打ちをした。どうやら手ごたえが無い。

気配の正体が闇から姿を現す。

まず浮かんだのは白いブラウス。

そして揺れる頭髮。

『女の子！？』

渚が心の中で声をあげる。

すでに、自分では唇一つ動かさなくなっている。

彼の体を操る権利は竜胆に移っている。

「のようだな。今回は一人だと聞いていたが…まさかこう来ますと

は」

すでに操作中なので思うだけでも十分渚には伝わるのだが、竜胆はあえて口に出した。

少女の左半身のみがぼけた蛍光灯に照らされる。

右半身は闇に隠れて見えない。

白とブラウンのチェックのスカート。こげ茶色のハイソックス。手には武器を持った様子が無い。

「二匹の、狂犬……！」

少女が呟く。

『狂犬……？』

『クク、渚君、上等じゃあないですか。これ以上我々を形容するのに適切な比喻がありますか』

沈黙。表向きは、とても緊迫した。

竜胆が静かに距離をとりはじめた。

少女は油断無くそれを左目で追う。

『……竜胆サン。こいつ変だ。右半身が見えない……いや、多分、無い』
『ええ。わかっています』

少女の姿が消えた。……ように見えた。

「ぐッ……！」

竜胆がうめく。

『！？ 竜胆サン！？』

渚がもどかしげに黒目だけを泳がす。背後の竜胆の様子が見えな
い。首をひねることも出来ない。

『大丈夫だ：しかし彼女は？』

竜胆が脇腹を押さえている。指の間から、血液。

渚の視界の隅で、闇がかすかに揺れる。次の瞬間、

「！！！」

渚に打撃、のような感覚。すんでのところで竜胆が飛躍させるが、
腿に負傷。

少女が地下室の中央に現れる。

真上からは、力なく点滅しているとはいえ、蛍光灯の光を受けて
いる。

しかし、彼女の右半身は闇に染まっているように目に見えない。
背を丸め、ぜいぜいと息をついている。

「お兄ちゃ：父さんっ」

少女は弾んだ息に掠れた声でそう言った。

「成る程」

竜胆が、呟くように、しかし凜と通る声で言う。

「私のような異常な人間は他にもいるということですか」
靴の音を響かせながら竜胆が渚に近づいていく。

「複雑な気分ですよ。ほっとするような、憎いような：」

竜胆は、独りごちはじめると長い。

「まあ、ひとまずは私の稀少価値が下がるので消えていただきたい」
スカシテイ・パリュウ

少女の、上目遣いの睨み顔が陰しくなる。

少女の全身が闇に消える。

『！！』

『行きますよ、渚君』

闇が揺れる。渚に恐ろしい速さで踊りかかった。

渚がバック転のような動きでそれを避ける。

影が渚を2・3アクション追い、そして白いブラウスが一瞬見える。

そこに渚の脚。

確かな手ごたえ。

「キヤああアッ!!」

少女の姿が一瞬点滅するように出現する。しかし何かのバグが修正されるようにまた闇に消えた。

「長期戦になりそうだな」

ほとんど舌打ちしながら竜胆が言う。こんなにぎりぎりで醜く勝たなければならぬのが彼はかなり嫌いだ。

『…あの攻撃、…竜胆サン、大丈夫?』

竜胆は頷いた。そして声に出さずに渚だけへ話しかける。

『ああ。しかし妙だな。得物を持った様子はないが、これは素手ではとても不可能だ。打撃を受けた感覚もなかったし…何と言おうか、まるで、掠め取られるようじゃなかったかい』

竜胆は先ほど攻撃を受けてからずっと押さえていた脇腹の左手をどかした。その部分の服もなくなっている。どれほど深いかかわらないが、少なくとも皮膚はなくなっているようだ。同じ攻撃を受けた渚の腿も、その部分のGパンがくりぬかれたように消えて、赤い傷が覗いていた。

『うん。かすただけだからわからないけど、一瞬何かに塗りつぶされるみたいだった』

竜胆がはっと視線を闇に向ける。そのまま2、3秒、考え込む。そして、彼の脳内の高速演算コンピュータはある1つの仮定を叩き出した。

『塗りつぶされる…なるほど。ありがとう、渚君』

渚は何も聞かなかった。聞かなくても、竜胆から伝わる勝利の予感だけで十分だった。

闇が揺れる。

その様子を、竜胆は何かを試すようにじっと見つめた。

一瞬少女の姿が現れる。竜胆は敢えて渚を動かさない。

また少女が真っ暗に染まり、渚に踊りかかる。

それを見越したように竜胆は渚を避けさせた。

『やはりか』

竜胆は意を得たりとばかりにひっそりと笑った。

『作戦変更だ、渚君。美しく、勝とう』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4873b/>

Twin DareDevil Adeline

2010年10月11日11時25分発行